

## 夭逝した天才棋士の実話小説「聖の青春」の医学的考察

### 1. 天才棋士・村山聖について

実在したプロ棋士；村山聖（むらやま さとし）をご存知ですか？ 小児期に「ネフローゼ」を発症し、闘病生活を続けながらも将棋の世界に飛び込み、才能を一気に開花させて名人位にもう少しで手が届くところまで登りながら、最期は力尽きて29才という若さでこの世を去りました。

私は、将棋は全く素人で、村山君が将棋界で活躍していることは、ずっと知りませんでした。彼が、亡くなってから、小説に描かれたり、テレビのドラマになったりして、知りました。昨年には、映画化されました。

私は、昨年、映画「聖の青春」を見に行きたくて、その前に原作のノンフィクション小説を読んでおこう、と買い求めて数日で読み切りました。原作「聖の青春」（大崎善生著）は講談社より2000年2月に単行本で刊行され、2002年に同社から文庫本が出ました。著者の大崎氏は、専門誌「将棋世界」の編集長時代に、生前の村山君と交流があり、また、村山君の師匠の森氏と親交がありました。この小説は、村山聖の壮絶な生き様を描いた渾身のデビュー作で、第13回新潮学芸賞を受賞しています。

以下の文章は、この文庫本の内容を基にして書きました。

### 2. 村山聖の生い立ちと駆け抜けた人生

村山君の人生を事実を追いながら、ザッと解説してみます。

彼は、1969年（昭和44年）6月15日生まれ。家族は、父；伸一、母；トミコ、兄；祐司、姉；緑。父は工業高校から苦勞して広島大学へ進み、卒業後はエンジニアとして会社勤めをしていた。母は、広島で被爆し、後遺症の肝障害をかかえていた。

聖は、5才でネフローゼを発症、病院での療養中に、たまたま父親が将棋盤と駒を買ってきて聖に与えたのが、将棋との出会いであった。その後は、母に将棋の本を買ってきてくれるよう頼み、むさぼるように読破していく。母は、あちこちの古本屋を回って将棋の本を買い求め、届け続けた。病状は一進一退を続けていて、療養に専念するため小学2年の時に、いなかの療養所に移り、小学校卒業までそこに併設されていた学校ですごした。

独学でメキメキと腕を上げた聖は、10才の時、近所の「将棋教室」に入ったが、しばらくすると、そこでは対戦相手がいなくなり、さらに「将棋道場」に移った。

昭和57年、中学生になっていた聖は、療養所を出て自宅で療養していた。父に連れられて上京し、中学生名人戦に参戦したが、全国から強豪が集まる中、ベスト8で敗退した。

その年の秋、プロ棋士をめざすと決めた聖は、両親を説得して大阪に出て、森信雄四段に弟子入りした。当初は2DKの師匠のアパートに同居させてもらった。

1983年（昭和58年）12月、「奨励会」入会（5級）。プロ棋士を目指して鎬を削る日々、しかし、聖は時々体調をくずしては入院を繰り返していた。それでも5級から着実に昇級し、昭和60年1月には1級に上がり、その春、中学校を卒業。高校進学は考えず、将棋に没頭する日々を送った。師匠のアパートを出て、「前田アパート」に移って、1DKの部屋に住み始めた。

その後も順調に勝ち進み、

1985（昭和60）年8月、16才、初段（12勝4敗）

1986（昭和61）年1月、16才、二段（12勝4敗）

1986（昭和61）年7月、17才、三段（12勝4敗）

1986（昭和61）年11月5日、17才、13勝4敗で四段に昇段。奨励会を卒業し、プロ入りした。奨励会在籍2年11か月、体調不良で休会した回数を考えれば、まさに驚異的なスピードで5級から4段まで駆け上がった。

その後も、病気を抱えながらも腕を上げ、「東に天才羽生、西に怪童村山がいる」といわれた。平成5年（23才）、谷川王将に挑んだ初のタイトル戦で、聖は0勝4敗と惨敗したが、B級に昇級できた。

1995（平成7）年4月1日、25才、A級へ昇級し、八段となる。東京にマンションを借りた。

1997（平成9）年2月、聖は東京のマンションを引き払い、故郷の広島に帰った。大学病院での精密検査で、膀胱癌と判明、6月16日に手術、膀胱と前立腺を全摘。医師は再発予防のための追加治療を勧めたが、聖は拒否し、病後の回復を待ちきれないように、再び順位戦にもどって行った。

1998（平成10）年2月、癌の再発が発覚。4月には、画像診断で予想以上の転移巣の広がりを確認。自分の死期を悟ったかのように、遺言を書いたり、父親に自分の葬儀は密葬にするようにたのんだりした。5月、転院した広島市民病院の特別室に入院し、8月8日に死去、29才。

1998年8月9日、九段位を追贈された。

通算成績： 356勝 201敗（このうち不戦敗、12局）

対・羽生善治： 6勝8敗

### 3. 両親の覚悟と献身

息子を重い病気にしてしまったことは、両親にとってトラウマだった。当然ながら、息子の夢をかなえられるように、精一杯、献身的に支援し続けた。聖のリクエストの将棋の本を求めて本屋を回り、新聞や雑誌の将棋欄をスクラップした。聖が療養所から外泊で帰宅した時には、父は近所の将棋の強い人をさがしては、聖との対局をお願いして回った。聖が腕を上げるにしたいがい、休日には療養所に迎えに行き、あちこちの将棋のイベントに参加させた。

師匠の森棋士に入門して大阪へ移った聖の世話のために、母は大阪にアパートを借りた。そして、大きい対局の後、ちよくちよく体調を崩す息子のために、広島から駆けつけて世話を続けた。

平成10年5月、最期の入院となる広島市民病院への入院でも聖は、食べ物、本、棋譜、録画ビデオ、など買ってくる物、持ってくる物、をあれこれと両親に頼み、両親は献身的に応えるのだった。

聖の死後、1年ほどしてようやく落ち着いた父；伸一は、聖の生きた痕跡をまとめる作業に取りかかった。数千冊に及ぶ蔵書や500枚におよぶCDなどを、丹念に整理してリストに作り上げた。そして、自分や妻、聖の手帳や日記を始めとしてあらゆる資料を調べて、聖の1才から29才までの年譜を書き上げた。これらを大いに参考にして大崎善生氏は、

「聖の青春」を書き上げた。

文庫本「聖の青春」の最後に、父；伸一の手記が10ページに渡って載っている。聖を重い病気にかからせてしまった責任を、自分とトミコで一生背負っていこうと覚悟し、聖が好きなように人生を送れるよう支援すること、それだけが自分たちの使命であり役割だ、と考えて実行してきた、そしてやりきった、という気持ちがひしひしと伝わってくる。

#### 4. 村山聖の病状と受けた医療について

昭和49年の夏、聖は5才。父；伸一が、元気がなく顔が腫れ上がって、さえない表情の聖を見て、異変に気づいてギョツとした。広島市の総合病院の小児科に連れて行き、受診した結果、若い小児科医が母親に宣告した。「お母さん、これは大変ですよ。ネフローゼです。」「お母さん、大変な病気にさせてしまいましたねえ。」その夏、聖はすぐに入院となり、それから長く病気とつきあうことになった。

若い小児科医のことばは母親の胸にグサリと刺さり、息子を重い病気にしてしまった責任を一生背負っていこう、と覚悟させた。妻から報告を聞いた父親も、自分の不覚に愕然とした。かかりつけの近所の医師に診せても、ただ「かぜ」としかいわず、検尿もしてくれなかった。なぜ、もっと他の医師に診せよう、としなかったのか、別の見立てをしてくれたかもしれないのに、と悔やんだ。

病気をかかえながらも、プロ棋士を目指して弟子入りして、大阪に移り住んだが、風呂は週1回ぐらいしか入らないし、歯磨きも気が向いた時にしかやらない、髪の毛、ひげ、爪、も伸び放題、という状態で、師匠も時には注意をした。「飯、ちゃんと食うとるか？風呂入らなあかんで。爪と髪、切りや。歯も時々磨き。」森師匠は、聖を自分のアパートに時々呼んで、自ら聖の頭を洗ってあげたりした。

聖が長く住んだ「前田アパート」の四畳半の部屋は、壁側に少女漫画や推理小説などの本がうずたかく積まれ、ゴミが散乱し、中央に一人がやっと寝られる場所がある、といった有り様だった。母が掃除をしようとする、それをいやがって母につらく当たったりもした。

1995（平成7）年初頭、B級での順位戦を戦っていく中で、厳しい対局後に決まって体調を崩し、駆けつけた母が住友病院に連れて行って入院、しかし医師の制止を振り切って逃げ出してしまう、の繰り返し。

その年の4月にA級に昇級し八段になって、東京に住むようになってからは、東京の大学病院に通院していた。

平成8年の秋、血尿が続くことを心配していた。医師に相談したが、「神経性のもの」と言われた。しかし、自分では「癌」ではないか、と心配になり、父親にも相談した。

東京から広島にもどった聖は、大学附属病院で精密検査を受け、膀胱腫瘍が見つかった。当初、医師は良性のものと説明したが、真実を話してほしい、と聖が強く訴えたため、医師は病変が癌であり膀胱の摘出が必要であると告知した。当初、聖は手術を拒んだが、医師が時間をかけて懇切丁寧に一つ一つかみ砕くように説明し、さんざん逡巡した挙げ句に聖は手術を受ける決心をした。

生涯を通して、聖は多くの医師の世話になったが、どうも当たり外れがあったようだ。この本を読んでいて、私自身、こんなことを言ってはダメでしょう、とか、こんなふうな

対応をしないように気をつけなければ、と思うことがあった。もし、自分がこのような患者を受け持つことになったら、どうしたんだろうか、と考えさせられもした。

それにしても、ネフローゼを患いながら、身体を清潔に持つことの重要性、ということに全く頓着しない、というのはどうしたことか、と考えさせられた。医師としては、口腔内を含めて身体の清潔について、もっとしっかりと指導すべきだったのではないか、と思った。聖は、こだわりの強い性格なので、医師が指導しても自分の流儀を変えなかったのかも知れない。

そして、大きな疑問が残っている。それは、聖はなぜ、20代という若さで膀胱癌にかかったのだろうか？、という疑問。その答えは、私にはわからない。

## 5. 駆け抜けた29年を思う

村山君が、ネフローゼにならなければ、もっと長く将棋に打ち込めて大成できたか、というとそうとも言えない。病気で療養したからこそ、将棋に巡り会えた。膀胱癌についても、これによって確かに彼の寿命は短縮されたが、しかし、生きられる時間が残り少ないとわかっていたからこそ、一気に才能を花開かせることができたのではないか、とも言える。彼自身、「病気が自分の将棋を強くし、ある意味では自分の人生を豊かなものにしていくのだ」と考えていた。

## 6. 映画「聖の青春」について

2016年11月19日封切り。監督：森義隆。配役は、聖：松山ケンイチ、父：伸一；北見敏之、母；トミコ：竹下景子、師匠；森：リリー・フランキー、棋士；羽生善治：東出昌大。

始まりの場面は、体調不良の聖が、将棋の対局のため将棋会館へ行こうとしてアパートを出たものの、道端に倒れこんでいる。それに気づいた近所の電気工事屋のおじさんが、聖を助け起こし、将棋会館まで軽トラで連れて行く場面。

映画の内容は、原作にかなり忠実に作られている、と思われる。しかし、原作とくらべて、描写が少ないように思われたのは、聖の幼少期（特にネフローゼになるまで）、両親の苦悩と聖への献身、将棋の才能が花開く様子、など。特に、父親の陰が薄いのが、気になる。映画では母親の方が多く描かれているが、父親も決して劣ることなく、上記の如く、精一杯の献身をしている。

この映画は、DVD、BDがレンタルされているので、関心のある方は是非借りて鑑賞してみてください。  
(2017年4月)